

広報伊達 145

発行日 令和5年7月15日

発行者 伊達地区小学校長会
会長 遠藤和宏

編集 同 広報部

《 巻頭言 》



こつこつ とことん あきらめない

伊達地区小学校長会長
遠藤 和 宏
(桑折町立醸芳小学校長)

はじめに

現代社会は、グローバル化、少子高齢化、情報化など、社会の大きな変化に伴って新しい課題が生まれています。これは学校現場でも同じで、困難な課題をたくさん抱えています。指導時数や指導内容が増え、時間にも余裕がない中で、先生方は様々な課題を抱える子どもたちへの対応に追われています。

ところで、醸芳小学校には、「こつこつ とことん あきらめない」という合言葉があります。この言葉は平成25年度に学校経営の方針として初めて登場したもので、それ以来10年間にわたり受け継がれてきた本校の「根本精神」です。

「醸芳」とは

よく「『醸芳』とはどんな意味ですか。」と聞かれることがあります。この言葉が校名に付いたのは1913年(大正2年)です。明治9年、明治天皇は半田銀山を視察されました。その際にお供をしていたのが木戸孝允で、地域の偉い方が頼み込んで「醸芳」と書いてもらったそうです。(その掛け軸は種徳美術館に保管されています。)

「醸芳」は、淮南子の説に由来し、「醸」は酒を醸すこと、「芳」は香ある花のことで、「賢者能士を育成すること、あたかも米麴に和して酒を熟成するのごとく、盛んに多くの人材を育成すること」を意味しています。ちなみに「醸芳」の言葉は、半田醸芳小学校、醸芳中学校の校名にも使われています。

こつこつ

さて、本校の合言葉の「こつこつ」とは「継続」

を意味しています。まさに「継続は力なり」です。残念ながら私自身「こつこつ」は苦手ですが(笑)、自分で決めたことをやり続けることは、とても素晴らしいことです。毎日の成長はなかなか気づきにくいですが、努力を継続することで、確実に前へ進んでいきます。

とことん

「とことん」は「徹底」を意味しています。人は努力を続けていると、「あと一步」でつまづくことがあります。それを乗り越えるには、「ひと踏ん張り」が必要です。「こつこつ」続けるより苦しいかもしれませんが、目標を達成するには、「とことん」やるしかありません。先生方もそれを肝に銘じて指導をしています。

あきらめない

「あきらめない」は「根気」を意味しています。「誰一人取り残さない」ために、我々教師はあきらめるわけにはいきません。たとえ一人では立ち向かえないことでも、全職員で頑張れば、あきらめずにやり通すことができます。これが「チーム学校」の精神なのだと思います。みんなでやれば、なんとかなると信じています。

おわりに

すっかり醸芳小学校の宣伝になってしまいました。本校は今年創立150周年を迎えます。歴史と伝統のあるこの学校で仕事ができることへ感謝しながら、一方でそのプレッシャーに押しつぶされそうにもなります。これからも「醸芳」の名に恥じないよう、優れた人材(子供たち)を育成していきたいと思っています。

《 提 言 》



『地域に育てられた想いを育む』

国見町教育委員会教育長 菊 地 弘 美

【体験格差】

昨年12月、世帯年収の差が学力格差にもつながる「子どもの体験格差」の調査結果(中間報告)が、公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン(以下、CFCと記述)から発表されました。全国の小学生保護者2,097人へのアンケート調査の結果です。学校以外の時間(放課後)に行う体験を対象にしている要約すると次のとおりです。

- ①経済的に厳しい家庭の子どもの約3人に1人が、学校外の体験機会が何もない。
- ②物価高騰により、特に経済的困難を抱えている家庭で子どもの体験機会が減少している。
- ③現在の経済状況が厳しい保護者ほど自身が小学生だった頃の体験機会が少ない。

※CFCホームページから引用

また、文部科学省が令和2年に発表した「体験活動を通じた青少年自立支援プロジェクト」では、

- ①小学生の頃に行った体験活動などの経験は、長期間経過しても、その後の成長に良い影響を与えている。
 - ②体験をよくしていると、家庭の経済状況に関わらず、良い影響がみられる。
- などが統計データの分析から明らかになったそうです。

【異年齢の交わり】

皆さんは、子どもの頃、放課後はどのように過ごしていましたか。外で遊んだ方が多いのではないのでしょうか。外で遊ぶことは、地域で遊ぶことなので、異年齢の子どもたちと遊ぶことが普通でした。その中で、上の子は下の子の面倒を見るし、ケンカもすれば仲直りもしました。暗くなったら家に帰りました。

今はどうでしょう。子どもが少ないことやゲーム、スマホの普及で、遊ぶと言えば、同級生の家に行ってゲームで遊ぶことが多いと思います。ゲームは楽しいので、自分からは止められず、大人から注意されることもあるでしょう。少子化や

技術の発達、子どもたちの遊びにも影響し、異年齢の交わりが少なくなっています。

【大卒者の存在】

さて、都市と地方の教育格差は、様々な要因が指摘されていますが、子どもたちの「意識」の違いも大きいと言われています。都市と地方で、大きく差があるのが大卒者の割合です。東京圏では概ね8割、地方では5割を切ります。つまり、大卒者と交わる機会が少ない地方では、子どもたちの意識の中に大学という選択肢が入っていないと言われ、進学率が低い要因の一つと考えられています。

【多様な大人との交わり】

一方、学校には、学習意欲の高い子、特別に支援が必要な子、不登校の子、家庭に居場所のない子など様々な背景を持つ、多様な子どもたちがいます。地方での子どもたちの居場所は、どうしても家庭か学校になってしまいがちです。このことは、いろんな大人や様々な生き方、多様な情報に出会う・触れる機会が少ないことを意味します。

学習支援も大切ですが、加えて、外の世界と触れる機会を増やすことで、子どもたちが将来に向けた「職業観」や「自分軸」を創る機会となります。少子化で仲間と切磋琢磨するには限界があります。新しい世界、周りにいない生き方をする大人との出会いの機会を創ることが、コミュニティスクールや地域学校協働活動に期待されています。

【学校・家庭・地域で考える】

都市では可能で、地方で難しいことを補完するには、今の大人が、子どもたちの現状を理解し、その上で「学校・家庭・地域」で、子どもたちの体験を増やす「場づくり」「機会づくり」を考えることが必要です。

地域の大人と一緒に活動した体験は、子どもたちに、地域に育てられた想いを育みます。

《 新 会 員 よ り 》

桜とともに歴史を刻む



今年の紅屋峠の桜は近年になく見事に咲き誇り、すぐにSNSでその美しさは拡散され、大勢の見物客で賑わいました。地域の熱意が育て上げた桜の新名所と一体化する歴史ある柱沢小に赴任することができ、とても光栄です。そんな桜に囲まれて、柱沢小での第一歩を踏み出しました。出会った41名の子どもたちの瞳はきらきら輝いており、一層この輝きが増すようにがんばらなくてはと身が引き締まる思いでした。コロナ後

伊達市立柱沢小学校長 小野 忠大

の現在地を確認し、柱沢小において今何をすべきかを考えました。これまで本校で培ってきたユニバーサルデザインの視点を基盤に、「小規模校のメリットの最大化」と「本校ならではの教育の充実」を学校づくりの中心に掲げました。本校は、古くから地域の学校として愛されてきたことを受け止め、ふるさと柱沢を中心に据える教育活動を展開して参ります。何より子どもたちの笑顔、教職員の笑顔、地域の笑顔を大切に、桜の魅力に負けないような地域とともにある学校づくりを目指します。何卒よろしく願いいたします。

校長としての新たな挑戦



掛田小学校には以前6年間勤務しました。勤務1年目に東日本大震災が起きました。その時、管理職がどんな思いで対応をしていたのか、一担任であった私は考えることもありませんでした。管理職として毅然と対応していた姿からはわかりませんでした。ご自宅が大きな被害を受けていたということを知りました。学校で大きな災害や事故が起きた時、子どもたちの心身の安全を守るために、自分が管理職として何をすべきか…職責を感じ、身が引き締まる思いです。予測

伊達市立掛田小学校長 嶋原 啓美

困難な時代だからこそ、どんなことが起きても柔軟に、そして学校が組織として一丸となって対応できる体制を維持していこうと、今強く思っています。

石田小学校との統合、創立150周年の大切な年に、校長として再び掛田小学校に勤務できること、そして伊達地区に戻ることができたことに感謝し、校長としての新たな挑戦を目指します。

伊達地区の校長先生方のご指導を賜りながら、子どもたち、保護者や地域の皆様のために力を尽くして参ります。よろしく願いいたします。

心を一つに



挨拶回り時、高台から見る学区の景色は、花々が咲き誇る桃源郷で、こんなにも美しい学校に勤務できることを大変嬉しく思います。

明治時代、「いつまでも睦まじく発展すること」を願って誕生した本校は、「睦み合いの心」を校訓に、次年度150周年を迎える、地域あつての学校です。その校訓の如く、仲睦まじく、向上心をもって日々を送る素直な子供たちは、本校の歴史と伝統が育んだ結晶のような姿で

桑折町立睦合小学校長 齋藤 貴恵

はないかとも感じています。

今年度全校児童46名でスタートした本校には、桑折町初の複式学級ができ、小規模校の利点を生かしつつ、新しい時代を見つめた教育が求められ町の議会からも注目されています。

初任校長として、これから悩むことも多々出てくることと思いますが、一生懸命で、協力的な教職員や地域の方々に信じ、共に考え、心を一つにして学校づくりを進めていこうと思います。校長先生方のご指導ご助言よろしく願いいたします。

《 特 別 寄 稿 》

学校経営について

桑折町立伊達崎小学校長 佐藤 浩 哉

私は、今まで、中学校2校、現在勤務する小学校(再任用)1校で校長として学校経営をしてきました。改めて、私自身が何をどのように考え、どのような取組をしてきたか反省する機会をいただいたと考えて本稿に向き合っています。

小学校と中学校で学校経営を同じようにはできません。小学校には地域を巻き込んだ多くの行事があり、学校が地域に貢献する機会も多々あります。中学校には部活動、各種大会・コンクールが多く、何より、進路指導(含受験指導)があり、社会に対応できる人材を輩出しなければならない大きな使命があります。しかし、どちらも子どもを中心とした子どものための学校経営でなければなりません。そのような考えから今までどんなことに取り組んできたのか、特に改善や新たに行ってきたことを6つの視点から紹介します。

視点1 <児童生徒理解>

校長として中学校での生徒理解の直接的な機会は、授業訪問と部活動訪問、そして、朝の登校指導や昼休みの校舎巡回。授業では言葉を掛けることは控え、朝と昼は挨拶+ a をほとんど毎日実践しました。現在、朝は、交通指導と地域の方との情報交換で精一杯ですが、授業訪問(兼HP写真撮影)は毎日行っています。子どもと先生方の思いに近づけると感じています。

視点2 <不登校対策>

前任校では自前のSSRを昇降口の近くに設置しました。不登校(傾向)生徒が校舎に入りやすい環境づくりから行いました。また、新たな不登校生徒を出さないように、担任や学年教員の欠席者への危機意識が高まるようにと、欠席者の状況を詳細に把握して報告していただきました。3年間で着任時より不登校30人減となりました。

視点3 <LGBTQ>

調査によると10%近くの当該児童生徒が在籍

するということです。そこで、前任校では、自転車通学の安全、冬期の防寒を主な理由としながら、女子の制服にスラックスを導入しました。年々スラックスを着用する生徒が増えています。

視点4 <生徒心得(校則)の見直し>

今の校則には、現状と合致しない項目もあります。生徒、保護者各代表と教職員代表の三者で協議し、2年連続で見直しのための会議を開催しました。生徒の意見が少しでも反映するように配慮しました。校則は校長の責任において定めるものですが、不易と流行を考え、目の前の子どもたちが対象であることを忘れてはなりません。

視点5 <校舎巡回>

安全面を含め、児童生徒の生活や学習に適した環境となっているかを確認しながら校舎内を巡回しています。前任校では、職員室、校長室前の廊下全面に歴代校長の大きな写真が並んで掲示されていましたが、生徒の賞状を掲げるのに最適の場所と考え、歴代校長写真は縮小し、校長室内で掲示することにしました。

視点6 <全校集会>

校長の話は短い方がいいと言われることがありますが、本当に伝えたいことはしっかりと伝えなければなりません。それもメッセージ性が高い内容を一度で表現できるようにしようと、表現に苦労します。前任校では、中学生に絵本「でんでんむしのかなしみ」を読み聞かせしたことがあります。誰にでも悩みはあるという内容です。

校長でいる時間は限られています。子どものためにできることは、今やるしかないのです。強い思いがあればできるものは多いはずです。新任校長になった時の初心になって、夢と希望を持って取り組み続けたいものです。

編集後記

令和5年度の伊達地区小学校長会広報第1号(広報伊達145号)を発行することができました。ご寄稿いただきました国見町教育委員会教育長様、5名の校長先生方に心より感謝申し上げます。5月8日から、新型コロナウイルスの感染症法上の位置づけが「5類」に移行し、3年余り続く国のコロナ対策は大きな節目を迎えました。この3年間の制限の中で感じたこと、考えさせられたこと、工夫したことがたくさんあります。今後の教育活動の充実、働き方改革に向け、「伊達はひとつ」の思いでつないで参りましょう。次号146号は12月上旬に発行の予定です。